

---

# Sing for you

雲丹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Sing for you

### 【Nコード】

N7350C

### 【作者名】

雲丹

### 【あらすじ】

ただの中学生の杉田涼。普通の人より裕福で、でもヘタレなボンボン。そんな彼の、純粋な恋。

どこにでもいそうなとても平凡でとてつもなくフツターの少年がいた。名前は杉田 涼。名前もいたって普通である。

彼は三城中学3年。受験生だ。部活はコーラス部。だが一度も行ったことがない。家で毎日ゲームをしているばかり。いわゆる幽霊部員、というやつである。

そんな彼の家は結構裕福だった。ゲームやマンガはいつも買ってもらっていた。あることで当然だったのだ。つまりボンボンである。

友達も大して出来ず、人とも大して関わらない。別にそれでいい。涼はそう思っていた。そんなある日、少ない友達の一人に誘われ、その友達が出る柔道の試合に行った。

友達の試合が始まるまで時間があつたので、何か飲み物でも買うと思つて自動販売機を探していた。途中で他校のいろんな人に出会った。

「結構人がいるもんだな……」

そんな事を考えながら自動販売機を探していると、人にぶつかってしまった。

「あ、すみません」

そう言つてその人を見たたん、涼の背筋は凍りついた。

「おい…何してくれとん!？」

明らかにヤンキーである。耳にはピアス、鼻にもピアス、おまけに唇にもピアス。そんなに穴を開けて何が楽しいのか……などと考えている余裕はなかった。

「ちよい顔貸せや」

そう言われ、体育館の裏に連れていかれた。よくあるパターンである。ボンボンの子供がカツアゲされるってところだ。

「すみません…これで許して下さい」

そう言っで一万円札を出した涼だったが、それは逆に仇になったようだ。

「俺はお前を殴りてえだけなんだよ。ま、金くれるんならもらっとくがな」

そう言っってヤンキーは一方的に涼を殴りだした……。

「痛い……。やめて……」

「女みたいな声出してんじゃねえよ!」

「やめなさい!」

「だから女みたいな……」

「女みたいじゃなくて女よ!」

涼が声の先を見ると、一人の女の子がいた。短い髪に、幼い顔。だが、まっすぐ前を見据える目。柔道着を着ているところを見ると、出場者らしい。

「なんだ？何の用だお嬢ちゃん？」

「失礼ね！もう中学3年よ！」

「そーかそーか…。ところで何の用だ？」

「弱い者いじめしてるガキをとつちめに来たの」

「ああ！？何だとガキが！」

そう言って女の子に殴りかかるヤンキー。涼は止めようとしたが、恐怖で体が動かなかった。しかし、その必要はなかったようだ。

「ガキはどつちよ」

そう言いながら、パンチをかわしてそのまま背負い投げをした。涼はただただ啞然とその光景を見ているだけ。

「痛え！何しやがんだ！」

「悪いのはそつちでしょ」

「ちっ……覚えてろよ！」

そう言ってヤンキーは定番のセリフを残して逃げる様に去ってい

った。

「大丈夫？」

一息ついてから、女の子は涼に声をかけてきた。

涼はおどおどしながらも、なんとか返答する。

「あ……はい。どうもありがとう。何かお礼を……」

そう言いかけたが、女の子はその言葉を遮って笑顔で涼に言った。

「そんなのいいのいいの！それじゃあね」

それだけ言って、女の子は行ってしまった……。涼は名前も聞けず、大したお礼も出来ずに心に中途半端なわだかまりが出来たまま、その場を素早く去った。

神様など信じていない涼だったが、どうやら、神様とやらは涼を見捨ててはいなかったらしい。その日の帰り、またあの女の子に出会うことが出来たからだ。帰り道、涼がふと前方を見ると、女の子はいた。あちらも涼に気づいたらしく、

「おーい！」

と手を振って近づいてきた。そして一言。

「いじめられてた子！」

と指さされた。ちょっと傷ついた。

「どうも……。ありがとう。あの時は」

「いーのいーの！そんな事よりもキミ、中学生？」

「あ、はい……。三城中学3年杉田 涼です……」

「や、やけに礼儀正しいわね……。私は桜田中学3年、時田 玲よ  
！よろしく！そだ。キミ携帯持つてる？」

「あ、はい。持ってますよ」

「アドレス交換しよ！」

……。という訳でアドレスを手に入れてしまった涼。どうしよう。  
もしメールが来たら……  
そんな事を考えているうちに、携帯が鳴った。メールだ。

「どーも！時田です！杉田君、だったよね？部活何部なのー？」

という内容だった。涼はバスケット部とかサッカー部とか言っ  
てかっこつけようかと思っただが、嘘をついてもすぐバレる、と思  
い本当の事を言う事にした。

「コーラス部です」

「そーなんだあー。そういえば、10月に合同文化祭あるよね？あ  
の時にコーラス部の歌あるでしょー？私、行こうって」

それをみた瞬間、涼は愕然とした。えええええ！？僕はコーラス部といつても、幽霊部員でしかない。もちろん、去年も一昨年も文化祭には出ていない……。ああ、どうしよう……。そんな事を考え、不安に陥ってしまった涼だったが、気持ちとは裏腹に、手はこう打っていた。

「楽しみにしていて下さい！」

次の日。涼は決心して、コーラス部の部室に行った。

「ちわーっす」

「…誰だ？キミ…新人部員？」

完璧に忘れられている……。

「僕ですよ！杉田です！」

名乗ってもイマイチ反応が薄い……。

「あ、ああ！いたいた！で、今日は何の用？退部届とか？」

「…と……あの……」

言いたいと言えない。

本当の気持ちが出てこなくて。

心に言葉が詰まって。

でもやっぱり

言わなくちゃ。

心に固く決意した涼は、ハッキリと、そしてしっかりと目を見て言った。

「僕も……コーラス、させて下さい！いっしょに、合同文化祭で歌わせて下さい！」

一瞬ざわついた。だが、すぐ静まった。

「キミ……今更何言ってるんだい？あと1ヶ月だよ？今日が9月20日、文化祭は10月12日だから……1ヶ月ないよ。しかも、これまで来たことなかったのになんでいきなり……」

「お願いします！無理は承知です！」

そう言っつて涼は自然と土下座までしていた……。

「わ、わかった。そこまで言うならやらしてあげようじゃないか」

「ありがとうございます！」

「厳しくなるよ……？」

「…大丈夫です！」

決意は固かった。それから毎日、朝は早くから、夜は遅くまで練習していた。みんなとも何とか合うようになってきた。自分に初

めて『繋がり』を感じれた。

そしてついに本番前日になった。涼は時田さんにメールを打つ。

「明日はついに本番ですね！楽しみにして下さい！」

涼は、今まで感じたことのない自信に満ち溢れていた。最初とは違ってかわって、どんな返信が来るか待ち遠しかった。

しかし、1時間経っても2時間経っても返信はない。寝ているのかなと思い、明日は本番なので、それに備えてもう眠った。

次の日。文化祭本番だ。コーラス部は昼からなので、午前中はヒマだった。

涼は時田さんいるかな……なんて思いながら歩いていたが、会う気配もないので、戻ることにした。携帯を見ると、メールは入っていない……。何かあったのかと思ったが、リハーサルも近づいていたのであまり考えなかった。とてつもなく緊張していたのだ……。

リハーサルも終わり、ついに本番である。涼は緊張をほぐそうと必死だった。……だからメールが来ていた事など気づきもしなかったのだ……。

涼は観客の前に立つ。ゆっくりと、流れるようなメロディの音楽が始まる。涼は精一杯の力で歌を歌った。

心を解きほぐすようなその音楽に。

それを穏やかに見つめる保護者や先生の温かい視線に。

周りで共に歌う、素晴らしい仲間たちに。

涼は、その身を委ね、心行くままに歌い続けた。

だが一つ気がかりだった。

時田さんはどこにいるのか。

少し見渡して見るが、いる気配はない。

心配しながら歌い続け……歌が終わった。拍手が沸き起こる。しかし、この拍手で涼は舞い上がってしまった。自分はスターかのような気分になり、時田さんの事を忘れてしまっていた。

数分後、何時かを確認するため、携帯を取り出した。

『受信メール1件』  
となっていた。

その時ようやく、時田さんのことを思い出した。しかし、忘れてたことに罪悪感など全く感じていなかった。だから　バチが当たってしまったのかもしれない。

「時田さんからかなー……」

涼がそう思いながら、メールボックスを見ると『時田 玲』となっている。興奮冷めやらぬ、といった状態で早速読んでみる。しかし、その内容に、興奮は冷めざるを得なかった。

「私は、玲の母です。あなたが、玲がよく話していた杉田さんですね。実は、玲は暴走車にはねられて」

そこで一度、目を上げた。涼は、自分の身体中の熱が引いて行くのを感じていた。そして、プルプルと震え始めた。恐怖だった。涼にとって初めての恐怖。ヤンキーに絡まれたときよりも、テストの点数が悪くて親に怒られたときよりも、自分が事故で怪我をしたときよりも、圧倒的に怖かった。先を読むのが辛かった。

しかし、読まない訳にはならなかった。

涼は恐る恐る、また目線を下に下げる。

「……今日死んでしまったんです。合同文化祭に行く途中でした。だから玲はもうこの世にはいません。ですが玲の事、忘れないでやって下さい。それでは、さようなら」

メールを読み終わると、涼は愕然とした。悲しすぎて涙も出なかった……。淡々と書かれた文章が、涼の心に重くのしかかった。

コーラス部のみんなが話しかけてくる。だが全て耳を通り抜けていく……。打ち上げをするらしいが、涼は家に帰った。

「お帰りー。今日は良かったわね」

母が言ってきた。

「……ああ」

涼は力なく答えた。そして自分の部屋へと入った。

ベッドに横になる。頭の中が真っ白だ。何故…何故…何故…何故…何故…何故…何故…何故…何故…  
…何故…何故…何故…  
そればかりを考えているうちに、眠ってしまったていたらしい。夢の中に時田さんが出てきた。だが、彼女は一言しか話さなかった。  
「……さよなら」

この言葉は俺の心に重く、重くのしかかった。

次の朝。涼は起きると同時にメールを打った。そして…  
「さよなら」

と呟いた。一滴の涙とともに。

ピロリロ・ピロリロ。

「玲の携帯だわ」

玲の母親は、メールを見て…涙した。

受信メール

杉田 涼

ありがとう。キミがいてくれたから僕は頑張れた。キミがいてくれたから『繋がり』が出来た。キミがいてくれたから僕は変わった…  
かっこつけてるかもしれないけど…届かないかもしれないけど…  
…もう忘れちゃってるかもしれないけど…  
あの歌は、君に送る。

君のために歌う。

S  
i  
n  
g  
f  
o  
r  
y  
o  
u

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7350c/>

---

Sing for you

2010年10月28日04時06分発行